

第二期 第八十一号 (初版) (無料)

音信不通

本のビオトープ

2023. 04. 10 定有堂書店 発行

本屋の神話学

奈良 敏行

なぜ「再解釈」なのか―拙著刊行に寄せて(続)

岩田 直樹

辞められない日記

鳥居 貴彦

ビオトープの未明でつかまえて

ワクサカソウヘイ

本を作る側から

村瀬謙介

汽水のほとりから (25)

小原 修治

いわゆるひとつの「ブリ口騒動」

萩原 俊郎

オンシンフツウを届ける旅

松田 裕史

失われた本屋さんを求めて(続々)

ムラカミヒロミ

鳥取あれこれ その八十

内田 克彦

八代日記 (三十七)

齊藤 仁昭

ことのはをおいかけて

三浦 永理

春の大掃除

あきの素生

スコシ・ヤクニタツ 座敷わらし

ドラメリア

…… 編集後記



本屋の神話学

奈良 敏行

(定有堂 店主)

目の前にある事柄の本質を理解するためには、神話的構造のイメージを持つことが必要なのではないだろうか。本屋を始める前にあれこれ模索していた頃、親類の同僚が本屋をしているというので紹介してもらったことがある。その同僚は東銀座のホテルに勤務し、奥さんが店を切り盛りしているということだった。

途中有楽町の大きな書店に立ち寄って、彼は数冊本を買った。新刊だけど自分の店には入荷してないので注文したお客に渡すと教えてくれた。最初の教えだった。池袋で乗り換えて埼玉のある駅で下車した。数分歩いたところにその本屋はあった。下町商店街の情緒漂う中にあり、お店は魚屋か八百屋の店先のように、五坪くらいの店内は大きな平台で占められていた。その後手にした早川義夫さんの『ぼくは本屋のおやじさん』の表紙の藤原マキさんのイラストに似ていた。少し前までは普通にあった店舗形態だっ

たのだろう。くり返し思い出される神話的な風景だ。

乗換駅だった池袋には大きな書店があった。後日その店長さんと話をする機会があり、書店人の秘訣に触れる本はありませんか、と教えを乞うた。山口昌男『本の神話学』を教えてください。この大書店の眩しきの秘密がここにあるのかとむさぼり読んだ。

《個人ショップのシステムは、売り手と客の間に一定の人間関係（精神的繋がり）を前提とし、売り手は商品の内容とおのれのアイデンティティの間に何らかの関係を確立しているから、そうやたらなものを売らないという暗黙の前提の上になり立っている。》P. 55

この大書店は百貨店の中にあっただが、百貨店はさまざまな種類の商品が寄せ集められているので扱ひ品に対して心理的感情挿入がない、とも書かれている。しかし一方「蓄財へのエネルギーが知的エネルギーに転化する」とも書かれている。量が質に転化する時代だった。

この頃しきりにあの小さな本屋がとても懐かしく思い出される。本を定価で買ってお客に渡す。受けた注文に責任を果たす、それが自然なものとしてあった。そして本屋はなるべく良い場所にあることが大事で、規模の大きさはそれほど問題でなかった。良い場所にあるということが信用であり、その信用に基づいて外商もできた。大きな書店に

は「中心」の物語があり小さな本屋には「周辺」という物語があった。

町の本屋はこの「周辺」にあることを自覚するからこそ営む価値がある。小さな商いは楽しい。小さな商いの神話性には根元的な魅力がある。商品を通して遠く広い外の世界とつながり、それを地域の人々に届ける。商品が豊かに並ぶその場所には遊戯的な楽しさがある。山口昌男『歴史・祝祭・神話』は、遊戯は「人間の世界感情を活気あるものにする。」「*romance*という。生活世界の中でなぜ人は「本」を求めるのだろうか。「われわれの日常生活は世界が不完全なものであればあるほど、われわれは象徴世界においてその補填を求める」P. 92

小さな本屋が魅力的なのは、往来すなわち路上にあるからだ。通りを歩く人がたまたま立ち寄る。身の丈の交わりだ。この身の丈のかかわりで求められる本が平台に並ぶ。この本はいいねという合意がここには形成される。生活や暮しをほんの少し背伸びさせる世界が開ける。大きな書店の店頭は眩しく、足を揺るがすような衝撃がある。全く自分の生活世界とかけ離れた本が溢れる。この出会いを覚醒といっているのだが、覚醒の果てに地べたへ帰ってこれない人も多い。

往来・街角・街路は芝居小屋に似ている。市場を歩く

だけで昨日までとは違った自分になれるような高揚感がある。そして商う人、商いの場は固定したものが、そこにはなにか一皮むけば遊行的の正体を感じる。本がどうしても日常性を越えた象徴世界へつながるといふ性格をもつものだから、本屋の人も象徴世界とつながっているかのよう

に思える。
商いにはきつと日常と異なる時空間がある。人と世界のつながりのもう一つ別のつながりの仕方があるような錯覚をついつい抱いてしまう。

2023.03.17

山口昌男 『本の神話学』 中公文庫 1977

山口昌男 『歴史・祝祭・神話』 中公文庫 1978

早川義夫 『ぼくは本屋のおやじさん』 晶文社 1982

岩田直樹 『橋田邦彦・現象学・アーレントの再解釈
— 生活世界における公共性と倫理 —』小取舎 2023
一八〇〇円本体

太極拳教室（会場 定有堂三階）葉香クラブ（荷葉）
毎週 水曜 十九時半から ・土曜 十三時半から
講師 日本武術太極拳連盟 四段 公認A級指導員

定有堂教室「ドウルーズを読む会」
（講師 岩田直樹氏 公立鳥取環境大学特任教授）

定有堂教室「読む会」（岩田直樹氏 選書）
毎月一回 火曜日 詳細は店内掲示

なぜ「再解釈」なのか

—拙著刊行に寄せて

岩田 直樹 (公立鳥取環境大学特任教授)

(「読む会」選書人)

拙著『橋田邦彦・現象学・アーレントの再解釈』（小取舎、二〇二三年二月）の刊行を知らせた友人から、「なぜ『再解釈』なのか」というメールが送られてきた。「解釈」ではなく「再解釈」であるとすれば、一体どのような「解釈」を前提にして「再解釈」したのか。本質を突いた鋭い疑問である。

むろん、このような質問を想定してタイトルを付けている。この点については「はじめに」や「おわりに」では一切触れていない。読者にお任せしよう、と考えてのことだが、少々不親切だったのかもしれない。できるだけわかりやすく種明かしを試みてみよう。

まずは橋田邦彦について。ずいぶん前、それとなく何人かに「橋田邦彦にどんなイメージを持っているのか」と尋ねたことがある。最大公約数的には「開戦時の文部大臣で、敗戦後にA級戦犯指名を受けて青酸カリで自死した人」。もう少し踏み込んで「確か医学者だったと思う」「一高校長だったはず」と答える人もいる。どうやら「文部大臣」「A級戦犯指名」「青酸カリ」のイメージが強いようだ。

知人たちの橋田像は間違っていない。これを敷衍していけば、次のような従来の橋田「解釈」となる。東京帝大教授としての自然科学（医学・生理学）者の立場で王陽明、道元を読み込み、「行としての科学」「科学する心」といった日本の科学の方法論を提唱、第一高等学校長、第二次近衛内閣・東条内閣の文部大臣を歴任し、敗戦直後にA級戦犯に指名され、出頭要請を受け服毒自殺をした。

この「解釈」には橋田の四つの顔、すなわち科学者、思想家、教育者、政治家が現れている。拙著では、そのうち科学方法論、教育論を含めた橋田思想全般について、三つの思想的源泉を検討することによって「再解釈」を行った。生理学の内容、文部大臣時代の具体的な政策に関しては私の能力を越えており、ほとんど言及していない。

次に現象学について。「現象学とは何か」と問われたとき、一言で答えられる人はいるのだろうか。手許にある『岩波 哲学・思想事典』（廣松渉、子安宣邦ほか編集、一九九八年）「現象学」の項を開くと、二頁にわたって約四千字で説明してある（ちなみに辻哲夫による「橋田邦彦」の項は約三百字）。「一言」とはほど遠く要約は至難の業である。さらに厄介なのは「『誰の』現象学か」という問題が存在することだ。現象学はその「開放性」故に現象学者の数だけの現象学が存在していると言われるほどに多様

に展開している。現象学の大きな魅力の一つである。

従来の図式的「解釈」では、前期フッサール＝サルトル、後期フッサール＝メルロ＝ポンティ、フッサール＝ハイデガー（フッサールから離反）などの影響関係が論じられることが多かった。拙著では、精緻な「共同主観的四肢構造」概念によって「関係の第一次性」「事的世界観」を提唱した廣松哲学を、二〇世紀哲学の大きな潮流である「現象学運動」の一つの到達点として「再解釈」している。

第三にアーレントについて。アーレントの「再解釈」は橋田邦彦・現象学のそれに比べてわかりやすい。アーレント思想と言えば、『人間の条件』（一九五八年）における「活動的生活 *vita activa*」の三類型、「労働 *labor*」「仕事 *work*」「活動 *action*」が名高い。

拙著では、アーレント思想の全体像を概観するとともに、アメリカ議会図書館が所蔵する一九五三年の草稿（世界に先駆けて二〇〇二年に日本で『カール・マルクスと西欧政治思想の伝統』として刊行）に基づき、隠れた側面である「マルクス／マルクス主義に抗するアーレント」について「再解釈」している。

しかし、「再解釈」はこれら三つだけではない。もっと大きな「再解釈」を潜ませている。

私は「はじめに」で「現象学的視点」という語をきりげ

なく用いた。「厳密な学としての哲学」（同名の著作あり）の構築をめざしたフッサールには叱られそうだが、「現象学的還元」はぎつくりと言えば、先入観を排して虚心坦懐に物事を観察すること、さまざまな色眼鏡で眺めている日常世界を「判断中止（エポケー）」によって無前提の立場で探究することである。

橋田や廣松に政治的なレッテルを貼るだけで、彼らの思想・哲学を論究しない傾向があることは否定できない。マルクス／マルクス主義に距離を置いたアーレントが評価され始めたのが、マルクス主義陣営が力を失った冷戦終結後であることは象徴的である。

現在では、ナチズムに加担したハイデガーやカール・シュミットは、政治的言動と哲学・思想の両面についてさまざまに観点から論じられている。

「東条内閣で戦争遂行に加担したから怪しからん」とか「すごい哲学だと言っても所詮は新左翼運動の理論家だしよ」とか『武士は食わねど高楊枝』的な発想はちょっとね」と言っただけで、まぎれもなく歴史的人物である橋田、廣松、アーレントの内在的再解釈を怠ってはならない。そのためにも有効な理論的武器を提供するのが、他でもない現象学であることを決して忘れてはならないのである。

辞められない日記

鳥居 貴彦

(開風社 待賢ブックセンター)

中学生のとき、剣道部に入っていた。球技が苦手だという消極的な理由で選んだ部活動。同級生の部員ははじめ三人しかおらず、そのうちの一人もすぐに練習に来なくなりやがて「ラグビー部に入る」と言って辞めた。ひとつ上の学年にはたくさんの部員がいたのでしばらくはたのしくやっていたが、彼らが卒業すると活動は一気に寂しくなった。すぐ下の後輩は女子しかない。同級生も一人。それでも卒業までダラダラと続けることしかできなかった。それどころか、高校生になってもまた剣道部に入った。部員は少なく、大会に出ることもできないような人数だった。最後の大会には軽音楽部にいた何人かを連れてきて無理矢理人数を揃えた。なぜそうまでして続けていたのか、今となってはよくわからない。

「辞めていくヤツ」がちよっとうらやましかった。中学校の部活動だけでなく、大学、アルバイトほかいろいろ。辞めていくヤツはみんな次の目標に向かっていった。別の部活を始める。専門学校に入りなおす。新しい仕事につく。みんなどこかさっぱりした顔で辞めていく。残された者はなにをさっぱりしてくれているんだ、と呆然とするしかない。ほとんどの場合、自分は残される側だった。進んで自分から何かを選ぶことはむづかしい。では何も選ばずにただダラダラと続けていくことの方は簡単なのだろうか。

儲からない。生活ができない。腰が痛い。誰も褒めてくれない。やめる理由は常にいっぱいある。続ける理由はよくわからない。

オフィスビルの四階の廊下でスーツを着た人と話す。向こうもめんどくさそうだし、こちらも早く帰りたい。でも話す。さつきから「ほんとにやる気あるんですか」とか「趣味の店でしょ」とか直球で嫌なことを言われ続けている。たまにエレベーターが「チーン」と間抜けな音を出してドアが開く。しまいにスーツの人は「今おいくつなんですか」と言い出した。正直に答えると「はあ、まだ若いんやか」

ら……こんな本の業界にこだわってるとなんか別の業界に入らはった方がいいんじゃないですか？ まだ就職もできるでしょ」とめんどくさそうに言う。スーツの人も本の業界のど真ん中にいるはずだ。なんなんだこの時間は。こういうときちゃんと怒れる人はえらい。なんでお前にそんなこと言われなあかんねん、ふざけんな、もうええわ、と言えたらどんなにラクか。でも、そうねえなどと言いながら誤魔化している。後味の悪さだけが残る会話。結局やめることなく今の生活を続けようとしている。帰り道、クルマでかかっていたのは森高千里の「渡良瀬橋」だった。このひとはなんでこの町を離れないのだろう。

五才になった息子はスイミング教室に通い始めた。今のところ飽きることなく通っている。「明日は土曜日。スイミングの日」といいながら、いそいそとパンツを黄色いカバンに詰め込んでいる。たのしい時間は少しでも長く続けたい。

服部さんが本屋をはじめるといふ。仲間たちがあつまつてそれぞれにそれぞれの形で応援している。話を聞いた日から、ぼくもなにかできることはないか考え続けている。でもたぶんこちらがなにもしなくても服部さんはやるよう

な気がする。大丈夫大丈夫。

「本屋をやりたいなどおもって」という人は毎月のようにやってくる。このペースだったらそこらじゅうが本屋だらけになるのではないか。香川から久しぶりにやってきた人は「自宅の軒先を本屋にしたい」と言った。まずはおもてにベンチを置いてみたらどうですか、と言ってみる。店のはじまりはそこでぼんやりすることからだと思ふ。店の時間の大半はぼんやりすることに耐えること。お客さんのこないぼんやりした時間と必死になって戦うこと。もう今日は誰も来ないんじゃないか、このままでは潰れるのではないかという恐怖と向き合うこと。すくなくともうちはそうだ。いやうちだけかもしれない。

「開風社 待賢ブックセンター」

京都市上京区大宮通榎木町上る菱屋町818

ビオトープの未明でつかまえて

ワクサカソウヘイ

(文筆業)

なんとか手には乗りそうなサイズ感で、茶色くて、目はつぶらで、背中に縞模様が走っていて、尾はふさふさとしている。なんのことを表そうとしているのかというと、エゾシマリスのことである。このように形のあるものを言葉で説明するという作業は案外に難しいことなわけであるから、これが形のないものともなるとさらに骨が折れる。

先日の上梓した拙著『出セйкаツ記』の中にて、私は「システムよりも生態系に拠る経済圏を理想とする」といったような言を述べた。それはつまり無機質な経済活動に依存するのではなく、有機的な網目の中にお金や暮らしにまつわる活動を織り込んでいきたい、といったような意味合いである。で、『出セйкаツ記』の刊行記念イベントなどで質疑応答コーナーがあると必ず客席からこの「生態系」にまつわる問いが飛んでくる。異口同音、それはおおよそ「この生態系とシステムの違いを、もう少し詳しく教えてほしい」というクエスチョンである。私は「あー」とか「うー」とか言いながら、曖昧模糊とした返答をする。形のないものの手触りを伝えるというのは、本当に難しい。

そんな折。それは刊行記念イベント終わり、お客さんが去った会場で関係者の方々と雑談を交わしていた際。ある言葉に触れて、急に閃くものがあった。その日のトークゲストであった作家・宮田珠己氏が語った言葉である。

「お金は生活を続ける上でももちろん重要だし、あればあるだけ困ることもない。もちろん自分もお金が欲しいよ。でも、なんだろうな、『お金なんか稼いでいる場合じゃない』っていうのがあるんだよね」

お金なんか稼いでいる場合じゃないーこの一言に、私は卒倒しそうになった。そうだ、本当にそうなのだ。お金は切実に欲しいが、しかしお金なんか稼いでいる場合じゃない、っていうことがあるのである。

これは、生態系の正体を表す詩にも近いと感じる。すなわち、生態系に拠る経済圏では、お金の優先度が低い。そこにあるピラミッドでは、頂点にお金が来ない。お金が目的となっていない。じゃあ頂点に据えるのはなにであるべきなのか。それは各々が決めていい。散歩をすることでも、石を拾うことでも、磯で魚を観察することでも、本を扱いながら街を織りなすことでも、好きなものを配置してよ

いのだ。

もちろん、「お金なんてどうだっていい」ということではない。お金にしか解決できない問題というものは、確実に存在している。だから生態系的経済圏において、お金はピラミッドの底の方に据えられる。それは地下水脈のイメージで捉えてよい。地上からは見えないが、お金は地面の下に流れている。やがてそれは池として現れ、そこにトンボや蝶が飛んでくる。ヒキガエルが卵を産みに来ることもあるだろうし、シロサギが水を飲みに来たりすることもあるかもしれない。出入りが自由な、ビオトープ。その生態系の中にトップ・プレデターとして、お金を稼いでいる場合ではないほどに重要な「ヌシ」が存在している。

反してシステムとは、お金の優先度が非常に高い状態、もしくは機能のことを指す。競走馬の先に吊るされたニンジンと同じような感じで、お金は据えられている。お金を得ることを大目的としてエネルギーは発動されている。それがシステムなのだ。生態系とは根幹から異なるものである。

生態系とシステム、どっちのほうが正しい経済圏なのか、なんて私には決められない。ただ、個人的に好ましく思うのは、やっぱり生態系である。生態系は射程が長そう。システムは、短そう。

先日、とある知人から「クラウドファンディングに挑戦しているから（金銭的に）協力してほしい」という連絡があった。げんなりしたので、無視した。そのあとで、私はいったい何にげんなりしたのか考えてみた。クラウドファンディング自体は否定しない。ハサミは使いようだ。そのクラウドファンディングを「お金なんか稼いでいる場合ではない」という状態ではなく、お金の優先度が高いシステムとして扱っている点に私はげんなりしたのだろう。「お金を払うの？払わないの？」という不健康な二択を作ってしまったところがまた、システムの成せる業といった感じで、射程の短い未来を招きそうである。

お金を得たら、なるべく地下の水脈へと流し込むような態度を取り続けたい。そうやって、自分の半径5mに、小さなビオトープを形成したい。接続と断絶が同時に行われるような、出入り自由の池の中で、「ヌシ」の存在のこトばかりを追いかけていきたい。とりあえず現在の私のビオトープの「ヌシ」は、「北海道に行つて色んな野生動物を観察したい」ということである。エゾシマリスとかに会いたい。お金を稼いでいる場合じゃない。

本を作る側から

村瀬 謙介

(小取舎)

二〇二〇年一月に、立ち上げてからこれまで一年に二〜三冊ペース、商業的なペースに載せているものはこれまでに五冊。ひとり出版なのでこのペースは順調だろう。著者との打ち合わせに始まり、執筆の方向性(の指示)、ページ割、組みのデザイン、フォントや文字の大きさ、装丁、校正、入稿した後も、印刷所とのやりとり、書店とのやりとり、一部取次とのやりとり、広報などの販売促進などを行い、さらに販売窓口としてアマゾンとも契約しているものだから日々の注文の梱包や発送も小取舎でおこなっている。

小規模出版社は、大手出版社に比べて出版部数が少ないため、ターゲットとなる読者層を細かく設定し、それに合わせた出版を行える。例えば、地域性を重視した書籍や、マニアックな分野の書籍など、ニッチな市場を開拓するこ

とができる。また、小規模出版社は、著者とのコミュニケーションが密であるため、著者の意向やアイデアに沿った出版が可能なのだ。

小取舎で本や小冊子などを出してきて個人的に校正よりも大変なのが著者との知識のすり合わせである。先に言っておくが大変と同時に醍醐味でもあると感じている。私は情報を取り入れる際には広く浅くできたものだから、大抵最初の著者との打ち合わせで己の浅学さを痛感する。それは著者の方が各内容については詳しいのは当然な訳で、その打ち合わせで初めて知ることが多く毎度新しい扉が開かれている。同時にどこまで深淵まで近づくかも見定める訳だが。例えば、絵本を作った時は、最初の打ち合わせで絵本にも細かい読者ターゲットがあることを知った。考えれば当たり前なのだが、二歳〜四歳をターゲットにした絵本と小学生低学年をターゲットにした絵本、小学生高学年をターゲットにした絵本はまるで違う。小取舎から発刊した絵本『まっかないちご』での打ち合わせで原案を見せてもらったときに正直、「で？」と思ってしまった。口に出すまいとは思ったがこれからこの著者と絵本を作っていくのであるから言わなきゃいけないことは言おうと「これはどういう意図ですか？」と直球で尋ねた。するとその著

者に「自分の夫にも同じことを聞かれました」と言われました。この絵本は読み聞かせを念頭においた二歳〜四歳くらいをターゲットにしており、つまりは大人である私（と著者の夫）が求める絵本の物語のテーマを、メタファー的に仮に盛り込んだとしてもターゲットには全く響かないという事になる。それよりもカラフルな絵でイチゴちゃんが出てきて、語感が楽しい絵本の方がいいに決まっている。

最新刊の『前進―「決定版」碧川かたの生涯―』、それから『橋田邦彦・現象学・アーレントの再解釈―生活世界における公共性と倫理―』についても刺激の連続であった。打ち合わせで著者と最低限打ち合わせられるように、グーグル先生に尋ねたり、図書館で調べたりした。何しろ鳥取の文化を本で残すことが必要なんだと言っている小取舎の私が、碧川かたも橋田邦彦も初めて知ったのだから。毎回打ち合わせの準備と打ち合わせの度に脳みそが活性化されるようで刺激的であった。

編集校正段階を経て、出版社と著者はこれから出る本を何度も何度も読むわけだが、それについてもすごい体験だと思う。自分が好きな面白い小説でも二度か三度読むくらい。あとは大掃除の時に手に取ってしまう時くらいだろう

か。ページ数が多かろうが少なかろうが制作に当たって十回以上は同じ本を読む。読む視点が著者と編集者で違うのだが、同じ本を何度も何度も読むということの大事さも思い知らされる。

さて、最後に最近話題のチャットGPTに出版社と著者の関係性について聞いてみたら、

出版社は、著者の作品に対して責任を負うことがあります。一方で、著者は出版社のイメージにも影響を与えることがあります。そのため、出版社と著者の協力関係は、お互いの信頼関係に大きく依存することがあります。

と返事が返ってきた。ううむ。正論。

岩田直樹『橋田邦彦・現象学・アーレントの再解釈

―生活世界における公共性と倫理―』小取舎 2023

一八〇〇円本体

汽水のほとりから (25)

小原 修治

(県立高校教諭 湯梨浜町松崎在住)

定有堂書店が閉店するという。一ヶ月前、私はその話を近所の書肆・汽水空港のモリテツヤ君から初めて聞いた。嘘であってほしいと思った。その時モリ君は、十二年前、鳥取への移住を決めた際、この土地に関する情報は砂丘があることと定有堂があることだけだった、だから真っ先に向かったのが定有堂だったという逸話を披露してくれた。本屋を始める夢を抱いていた彼にとって、定有堂はパリのシエイクスピア&カンパニー書店のように、光輝く眩しい場所だったのだろう。閉店が本当なら残念だという想いを異口同音に述べた。でも、残念ながら、それは本当だった。本屋が好きだ。たとえば自分の場合、旅先で本屋の看板を見つけたら、必ず立ち寄りずにはいられない。店に入る前の、あのドキドキ感。入店後、棚を片っぱしから眺め、本の背表紙をチェックしていく時の、ワクワクする感じ。面白そうなタイトルを手にとって本を開いて吟味し、自

分を待っていてくれた一冊に今ようやく巡り会えたと勝手にセレンディピティに浸ることも出来る。そんな喜びをこれまで幾度となく味わってきた。本を買っただけなら、ネット書店で十分だが、本屋の素晴らしきは、本との一期一会の出会いを演出してくれるところにあると言えよう。

とはいえ近年、本屋の素晴らしきはそれだけではないと思うようになった。それは、本屋は本だけでなく、人との出会いの場でもあるということだ。戦前の上海の内山書店のような知識人のサロンでなくとも、無名の市井の人々、たとえ子供でも、何かを考えようとしている人間が自然に集まって、出会うことができる場所が本屋なのだ。だから店舗営業終了後も定有堂において、これまで通り読書会が継続されると聞き、とても意義深いことだと感じている。自分自身はほとんど参加したことがないにもかかわらず、ティユウの名が会いの場所として残るのは嬉しい。本誌もまた、新たに第三期が始まるこのことで、これも嬉しい。思うに同人誌もまた紙面上で人と出会う場所なのである。実は以前、定有堂の奈良さんに退職したら本屋をしたいと相談したことがあった。奈良さんは「本屋は大変ですよ」と、ちよつと賛成しかねるといった様子だった。「では、蔵書も多いし、古本屋はどうでしょう」と私が質問すると、「古本屋は街に必要ですか」と逆に質問されてしまった。

だから私はそれ以来、本屋は諦めることにしたのである。自宅近くに汽水空港が出来たことも、それを後押しした。その代わり、本や人に出会えるという、もう一つの本屋の素晴らしさを味わえる場所を創ろうと思いついた。それが現在進行中の私設集会所兼図書館の建設計画構想である。

自分はつくづく消費社会の申し子だと思う。本以外にもCDやDVD等、実に多くのモノを所有している。これは恐らくZ世代には見られない現象だろう。所謂オタクは80年代に生まれた流行語だが、その時代の空気を存分に吸って育ったのが良くも悪くも私たちの世代なのである。確かに、ネット空間では、モノは所有しないでも、データがあれば、楽しむことができる。何でモノを所有する必要があらうか。それはその通りである。が、所有するモノを活かしながら、本屋のように、ときめく出会いを演出するような場所を開くことはできないか。そこで思いついたのが自前で私設集会所兼図書館を創ることだったのである。

この集会所兼図書館のコンセプトは、「学び」である。だから集会所といっても、飲食をして騒ぐ場所ではなく、「学び」の場という意味で、教室のような場所にしたいと思っている。人との出会いは「学び」を通してこそ美しい。だから講義をしたい人や読書会を主宰したい人がいれば、無料で場所を提供したいと考えている。図書館も「学び」

の場の一環として開き、書籍やCDやDVDは教材として利用してほしい。そして多様な「学び」を通して、人々が自由に繋がることのできる社会のようなものを創りたい。

昨春亡くなった見田宗介は、『社会学入門』（岩波新書）の中で、社会を存立させる仕方には論理的に異なる四つの型があるとし、それぞれ「共同体 community」「集列体 seriality」「連合体 association」「交響体 symphoncity」と名付けた。このうちユニークなのは「交響体」で、見田はこれを「さまざま形の「コミュニケーション」な関係性のように、個々人がその自由な意思において、人格的 personal に呼応し合うという仕方です存立する社会のことだとしている。

見田が言うように、「交響体」が「個々人がその自由な意思において、人格的に呼応し合う」社会ならば、それは学びによって繋がる社会でもあらう。家族や村落のように自由な意思で選べない「共同体」や、貨幣の交換や契約の順守によって人格的に呼応しづらい「集列体」や「連合体」とは異なる「交響体」即ち「交響するコミュニケーション」。私は集会所兼図書館をそのようなものにならしたいと考えている。

いわゆるひとつの「ブリロ騒動」

萩原 俊郎

(倉吉市在住者)

「定有堂、閉店」の知らせを聞いた。倉吉にいと正直、まだその実感がわかない。定有堂との出会いは新聞社に入つた昭和56年だから、42年前になる。まだ開店して間がない頃だった。まずは奈良店主の長年の労をねぎらいたい。本当にご苦労様でした。そして、ありがとう。

「音信不通」もてつきり閉じると思い、行き場のないペン先をどこに向けたらいいか、途方に暮れかけていたら、「継続するつもり。もともと本屋を始める前から出していましたから」と奈良さんからメール。「書店」と「町の本屋さん」の違いは何より人とのつながり、と彼が昔どこかで書いていたのを思い出した。

◇ ◇ ◇
心機一転、この欄にも力が入る。

新聞社を退職した2020年の年末、音信不通に「幸い

なことに仕事に悔いや心残りはないが、ただ一つ気がかりなのは県立美術館の行く末」（第54号）と書いた。その思いはむしろ日増しに強くなっている。

県の林業大会での対談で平井知事と隈研吾が「鳥取にも大型木造建築（CLT）を」と意気投合し、翌年、隈が約束通り「これは日本最大級、自信作」と出してきた木造の県立美術館案を県があつさり落としたのにも驚いたが、いわゆるひとつの「ブリロ（の箱）騒動」である。

「3億円の購入」で話題を呼んだ騒動の中身については、マスコミで散々語られたのでここでは省こう。

論点をまとめると、県美の収集・運営方針に私が単純に「おかしい」と感じるのが次の3点。

① 前衛芸術を買う理由 「鳥取県の子供たちが既成の常識にとらわれず、新たな視点で物事を柔軟にとらえる教育効果」とある。だが子供には元々美術になんの常識も視点もない。既成の概念を覆す前衛作品に触れても、その意図は通じない。そもそも「文脈的におかしい」のだ。美術や美術史に疎い大人も同じ。②「江戸期」から「近代（明治

）戦前」 「戦後の美術の流れを示す作品」まで収集、まるで「全て」ではないか。一体なにが集めたのか。③では、館長は何をするのか。ここまで事細かに収集・運営方針を決められ、これから就任する館長は何をすればいい

のか。むしろ館長は館のコンダクター（指揮者）であり、収集・運営方針を決めるのが仕事ではないのか。

以上、こうしたモヤモヤを一気に吹き飛ばしてくれたのが、実は山田五郎氏である。



3月5日、米子市文化ホールで開かれた開館2年前カウントダウンイベントのトークセッションに、美術批評や世相解説などで活躍する山田五郎氏が招かれた。

山田氏は「若い頃訪ねたヨーロッパの各都市の公立美術館は、住民こそ主人公、鑑賞や運営に参加する権利がある」という姿勢だった。納税者だから当然だ。なかには美術館の改装を巡って住民が十数年も侃々諤々（かんかんがくがく）議論し続けた例もある」と紹介。

ウォーホール作品の問題は「値段のことよりも、美術史に詳しくない人や子供には（鑑賞の）ハードルが高すぎる。ニュートン力学の前に量子力学を見せるようなもの」「印象派の絵画と違い、本物を買わなくても複製で（作品の意図は）説明できるのではないか」。なるほど。

「マスコミも悪い。作品の価値を値段でしか判断できない風潮がある。世界には1億、2億を何とも思わない富裕層が山ほどいて、芸術作品が高騰している。ウォーホールも例外でない」「その金を国内の若手作家の支援に回して

はどうか」と提案した。

一方、県美の収集方針には「拝見して、あれもこれも」で驚いた。ほぼすべてを集めるつもりか。（対象を）広げすぎ。これでは（学芸員への）白紙の委任状だ。予算が莫大にある自治体ならいいが」と厳しい注文を付けた。

わが意を得たり、と感じた。だが翌日、一面に載った後輩記者の記事はまるでポイントをつかんでいなかった。

また、平井知事の記者会見で「ブリロの箱を買うか否かは、開館後の入館者の投票で選みましょう」という、まことに知事らしい提案があったが、「それは単なる話題づくりと、問題の先送りじゃないですか」と突っ込みを入れた記者は残念ながらいなかった。

星取県、蟹取県、兎取県：話題を呼ぶのは市場経済、マーケティングの肝要ではあるが、「駄洒落」の中で本質が忘れられてしまう恐れがある。多選や無投票が横行する「無気力な」鳥取県では、特にそれに気を付けたい。

これからは、いや、これからこそ市井のジャーナリズムが求められるのではないか、と意を固めた。

オンシントンツウを届ける旅

松田 裕史

(高校教員)

二月二五日(土)、教科指導に関するワークショップに参加するため、立命館大学の大阪茨木キャンパスに日帰りで赴くことに。日帰りということもあり時間はあまりないが、せっかくなので乗換駅の大阪梅田に隣接する梅田・蔦屋書店に行くことにした。そこには何人かいらっしやる本のコンシェルジュの一人として三砂慶明さんが勤務されている。僕は、一年ほど前の『音信不通』に三砂さんが上梓された『千年の読書』についての感想を書いたこともあり、三砂さんにご挨拶がてら寄ってみようと思ったのだ。

来訪予定のことを事前に奈良さんに伝えると、三砂さんに渡して欲しいものがあるということだった。三砂さんは昨年末、定有堂教室「ドウルズを読む会」にも参加されている。渡すものの中に、『音信不通』があった。それは、編集長ドラメリアさん経由で僕のもとに届いた。音信不通という名のつく冊子を届けようとする行為は一律背反的で不思議な心地がした。二五日に三砂さんが勤務されているかどうかはつきりと分からぬまま出発したので、猶更不

確定な空気は増幅された。

茨木キャンパスに行くには梅田駅から二区に乗り換え、十数分とかならない茨木駅で降車する。ワークショップが終わり、午後六時前に梅田に着く。土曜ということもあり、駅構内は人でごった返している。隣接するルクアの九階に蔦屋書店はある。三砂さんを訪ねる前に、店内をぶらぶらとしてみる。本棚が回廊式に設置してあるのが大きな特徴だ。回廊の内側は購入した本が読めるソファなどがふんだんに置かれている。全てのソファがすでに占有されており、購入直後の本に読みふける人、何やら資格試験に向けて参考書とにらめっこしている人、コーヒーを飲みながら仲間と談笑している人など様々である。本を次々と眺めているうちに、いつの間にかやう三周ほどしていることにふと気づいた。なるほど、回廊式だと興味、思考が途切れないのか。回遊魚のようにいつまでも回り続けることができ。しかし、ここに寄った大きな目的は三砂さんに奈良さんからの『音信不通』などを届けること。カウンターには五人ぐらい店員の方が途切れることのない客に対応されているが、三砂さんらしき人はいない。案内のカウンターに行き、三砂さんのことを尋ねる。聞くと、今日はお休みとのこと。奈良さんから預かったものを店員の方に託し、大切な任務が完了。三砂さんには会えなかった。でも、そ

れも『音信不通』を届ける旅らしい。早ければ次の日には三砂さんの手元に届くのだろうが、それが確認できるものさらに時間が経った後。どこまでも不通は続く。

スーパ―はくとの発車時間までもう少し間があったので、引き続き店内を回遊する。人文書コーナーはコンセプト別に配架されており、足を止めてじっくり観察する。最上段に濱崎洋三さんの『伝えたいこと』が三冊あるのを発見し嬉しくなる（『千年の読書』の中でも『伝えたいこと』は紹介されている。）『伝えたいこと』の隣に、朝日新聞記者・近藤康太郎の『三行で撃つ』が置いてあるのを見て思わず笑いがこみあげてくる。この二つの本に何かしら共通項はあるのだろうか。他の書店では決して二つが並ぶことはないだろう。『断片的なものの社会学』を書いた岸政彦の一連の著作も目立って置かれている。確か、岸は大阪に由来のある人だ。それもあって特集が組まれているのだろう。休日ということもあるのだろうが、カウンターには客が次々となだれ込む。ここでは紙の本が売れている、その当たり前ではなくなった現象を不思議な感じで見つめる。

三砂さんの推し本もある。他のコンシエルジェのコメント付きの本も何冊か所々に配置されている。せつかくなので何か買って帰ることにした。まず、三砂さんのコメントとともに平積みされていた、『これは水です』（デヴィット

ト・フォスター・ウォレス）。それから、今回の芥川賞受賞者の井戸川射子による詩集、『する、されるユートピア』。『この世の喜びよ』が受賞作だが、井戸川は小説の前に詩から出発している。現役の高校国語教員である井戸川は、詩を教えることに悩んだ結果、まずは自分で書いてみることにしたそうだ。その成果物が第一詩集『する、されるユートピア』であり、これがいきなり中原中也賞になる。教育の現場にいる人がどういう詩的思考を展開しているのか知りたくもあり気になっていた本だが、私家版しかないと思っていたので購入はあきらめていた。それが薦屋書店には詩歌のコーナーに五冊くらいひっそりと置かれていた。中原中也賞以後、さすがに青土社が出版して一般書籍になっていったようだ。旅の荷物にならない軽量の二冊のみ購入し、薦屋書店を後にする。

薦屋書店訪問から一週間ほどたった後、無事に『音信不通』などが三砂さんに届いたことを奈良さんから聞く。三月二十八日は岩田先生の著書、『橋田邦彦・現象学・アーレントの再解釈―生活世界における公共性と倫理―』をテーマにした三砂流読書会「読書室」が開催される。思わぬ形で三砂さんに会えることになり、本のビオトープは豊かな偶有性を宿した環世界なのだとあらためて思い知る。

失われた本屋さんを求めて（続々）

ムラカミヒロミ

（フライング・ブックマン）

高校時代、恩師たちと毎日のように、新刊本の争奪バトルを繰り返していた。舞台は、吉方二丁目交差点角、小谷薬局の一軒隣の谷口栄文堂である。

何せ、敵は就業時間中でも、校外に出られるので（今は、煩くなつて、いちいち許可が要るが、昔は諸事鷹揚だった）、こちらは圧倒的に不利。

試験監督にやって来た、F先生が書店カバールの掛かった文庫を読んでいる。小口が未断裁で、スピゲが付いているが、新潮文庫より寸詰まり。厚さもある、という所から創元推理文庫とアタリをつける。何だろう、とチラチラ見ていると、センセイ、ニヤツと笑つて、カバーを外し、その日出たばかりの新刊を目の前で広げて見せるのである。

もう栄文堂のヤツはやられた。放課はこつちが早いから、試験勉強なんか放つたらかして、帰る道々本屋をハシゴしまくりに、何とか入手する、という仕儀となる。（ハシゴで

きるだけの数の本屋があったのは幸いである）

しかし、悪いことばかりでもなく、ある時、職員室から呼び出し放送がかかり、おつかなびつくりに出頭すると、センセイ、一冊の新刊本を取り出し、「お前さんが探してると聞いたのでな。俺の肌には合わなかったから」といつて譲ってもらったこともあった。

末広通りを駅方向に向かうと、久松橋を渡つて直に岡垣書店があった。屋根も壁もトタン張りのバラック建築（誤植に非ず）だったが、間口一間の鰻の寝床に、古本が詰め込めるだけ詰め込まれていた。

智頭街道に目を移すと、瓦町ロータリーから智頭橋に向かって左手に、三和書房。十八禁雑誌の店であった。

橋を渡つて、山村交文堂。隣に花房書店があった。

この二軒は、小学生の頃まで、父や祖父に連れられてよく行った店だ。花房書店の先々代の主人が祖父の尋常小学校（！）の同級生とかで、よくオマケして貰った。（雑誌の付録などだが）

初音通りを左に曲がった所に店名を失念したが貸本屋

があつた。買い損なつた雑誌のバックナンバーを入手するのに重宝な店であつた。

智頭街道の中段、五臓圓ビルの手前に貸本屋のみほ書店。稀に古本が並ぶことがあつた。三島由紀夫の『宴のあと』を買つた覚えがある。『アムステルダム運河殺人事件』や『せどり男爵数奇譚』は、貸本上がりを買つた。当時は流布本がなく、容易に読めなかつたのだ。

あの頃は、貸本には全く関心がなかつたので、碌に見もしなかつたが、今の貸本小説ブームを考えると、もう少し、丁寧に棚をチェックしておくのだった、と後悔することしきりである。

二階町通りを挟んで五臓圓の向かいには、一番お世話になつた富士書店二階町店。

角店で、二方向に入口が開いていた…というか、昔の商店の習いで、ガラス扉は片側に寄せられ、開け放しの素通しであつた。(流石に冬場は閉めていたと思うが)

腰高の平台に、雑誌が陳列されている、古いタイプの店舗であつたが、壁一面の書棚には、著者別に古い刊行物もしつかり常備されていた。

中学時代に、週二、三回は通つた店で、お定まりの星新一、筒井康隆などの文庫本や、創刊間もないハヤカワ文庫、春陽文庫版江戸川乱歩、角川文庫の翻訳もの、遠藤周作、北杜夫、小林信彦などの単行本、晶文社の本など、ここで出会つた本には思い出が尽きない。

北上して、本町通りの角に丸豊食堂があり、ここも祖父とよく立ち寄つたが、つい先だつて取り壊され、コンビニの駐車場になつてしまつた。ここを曲がつた所に西谷敬文堂という古書店があつた。小柄な女主人で、値切るといからか負けてくれた。

智頭街道は裁判所に突き当たつて、旧国道二十九号線(現・五十三号線)と三叉路を成す。これを西進して行くと、湯所バス停前に貸本屋があつた。

湯所橋を渡つて更に進むと、青葉町あたりにも貸本屋が一軒あつた。店名は、どちらも覚えていない。

鳥取あれこれ その八十

内田 克彦（地域研究家）

（承前）

「岸辺福雄」を調べていくと、その活動は多岐にわたっており、全体像を把握するのは相当に困難であることがわかった。保関建典は『障害児に心を向けた人たち』の中で、次のように書いている。

岸辺は、膨大な数の文章を残している。といってもそのすべてにふれることはもはや不可能である。ありとあらゆるといってもいいほどの雑誌に、教育論から随筆、さらには童話作品などを寄せており、そのすべてを収集しようとするなら、かなり組織的なチームをつくらなければなるまい。

さらに、保関は、『復刻版「芸術自由教育」別巻 大正自由教育の光芒』の中で、富田博之が岸辺について書いた文章から、次のとおり引用している。

その幼児教育、女子教育、口演童話における〔岸辺〕福

雄の仕事については、「略」少しは知られている。が、玩具や絵本、さらに広い子ども我的生活文化、障害児教育など、子どもの教育と文化についての国際的視野に立った仕事については、あまり知られていない。

岸辺は、一九一九（大正八）年七月、「日本児童自由画協会」設立同人に加わり、「日本自由教育協会」と改名した協会の機関誌『芸術自由教育』では、山本鼎・北原白秋・片上伸とともに編集委員になっている。この仕事について、富田博之は『日本児童演劇史』で、次のように書いている。

雑誌『白樺』に拠る白樺派の運動に、たいへん似ているといえる。「略」白樺派の運動は、教育界に多くの支持者を持ったといわれるが、芸術自由主義教育運動もまた、教育界に、大きな影響を与え、新教育運動ともむすびついて、大正期、一九二〇年代の芸術教育運動の大きな潮流をつくったのである。

次いで、一九二二（大正一一）年一月に東京社（現ハースト婦人画報社）が創刊した児童雑誌『コドモノクニ』にも、創刊号への寄稿を手始めに、かなり多くの号に「キシベ エンチョウ」名で寄稿している。

さらに、一九二七（昭和二）年一月、フレーベル館

が創刊した保育絵雑誌『キンダーブック』には、倉橋惣三とともに編集顧問として編集指導にあたっている。

なお、岸辺はかなり頻繁に海外渡航をしている。川勝泰介「岸辺福雄『親のため子のため』解説」（『親のため子のため』）によれば、次のとおりである。

一九一四年、初めての米国旅行。一九二〇年八月には日本の委任統治領ヤップ島への旅行、翌年五月から六月に朝鮮・中国旅行へ、さらに、同年十月には、二度目の欧米旅行である。

さらには、一九二八（昭和三）年に東京市会議員に当選（四年間）後の、一九三〇年九月から翌年三月で東京市長から児童教育と社会施設との視察研究を嘱託されたの欧米訪問（その感想記として『若きママさんに』を一九三一年に刊行）がある。

そして、帰国後の一九三〇（昭和五）年七月の東京市本会議で、医学博士である田代義徳市議員による「不具児童教育所」の設置の提案に深く賛同した岸辺は、肢体不自由児学校の設立に尽力し、一九三二（昭和七）年五月に「東京市立光明学校」が一学級一五名で、麻布新堀小学校廃校舎を改築して開校した。東京市立光明国民学校の『創立十

周年記念誌』に載る、岸辺の校舎新築の落成式の祝辞から次のとおり引用する。

……私は小児脊髓麻痺を病む子を持ちました。感冒でなくしてしまひました。四月一日に学校へ行つて、その子の鞆を机の上のせて、あなたの机ですよと、言つてやりました。親の心といふものはこんなものです。

……肢体不自由は相当に多うござります。私はこんな子のために、教育のために、こんな学校をつくりたいと思ひました。そして、市会に打つて出しました。

以上で、今回の調べを終わる。ここでは、これまで触れなかつた著作を掲げることにとどめておく。

- 一九二四年（翻訳書）『童話の実際と其批評』丙午出版社
- 一九三二年『若きママさんに』実業之日本社
- 一九三九年『岸辺福叟名話集』東洋図書
- 一九五〇年「天神さまとお地藏さん」（思想の科学研究会編『私の哲学（続）』中央公論社）

一九五八（昭和三三）年、岸辺福雄死去。

（この項、了）

二〇三三・三・二五

八代日記

(三十七)

齊藤 仁昭

(ケバブジョンソン・

元長崎書店)

三月某日

現代にはいろいろな信仰があるはずだ。そして信仰のあつさと習慣には関係があるように思うが、自分は何んでも三日坊主であり、ということは信仰心が薄い、または無神論者なのだろうな、とよく思う。継続する力を持つ人々に畏敬の念がある。

三月某日

セリエA、ナポリが強い。残り11節で2位との勝ち点差が19。あと5勝で自力優勝が決まる。インテルもミランもさほど調子は良くなさそうであり、このままスクデッロの可能性が高いだろう。フォルツァ。

こないだ何かのテレビ番組でナポリの街の様子が流れていて、エスプレッソ1杯百四十円とか言っていたが、イタリアの物価ってそんなに安いものなのかしら、コーヒーマグが安いだけ？とか考えたけれど実際どうなのだろう。

三月某日

ミュージックマガジンの高橋幸宏追悼号を読む。
(「ミュージック・マガジン4月増刊号 高橋幸宏 多彩なロマンティストの軌跡」) 膨大な仕事量と、一貫性に感嘆。筋が通っていることはかつこい。

三月某日

『ライク・ア・ローリングカセット カセットテープと私―インタビューズ61』(湯浅学著、小学館、2003年)をパラパラ読む。カセットテープにまつわるいろんな人々へのインタビュー。どの方のインタビューにも寂しくない孤独が感じられて親近感が湧いた。あの筐体に詰め込んだ思い出はほんとうに素晴らしいものだった…。実家にある段ボールに詰め込んだカセットテープ。自分で編集したやつとか、恥ずかしくて聴けないかもしれないが今度あさってみよう。ああでも今プレイヤーがないのだった。ハードオフからだな。

三月某日

子どもがふたりとも熱を出したので小児科へ連れて行く。長男がインフルエンザ、次男がヘルパンギーナに罹患していた。長男は四十度の熱にうなされて譫言を言ったり、

目をつぶったまま、むし岡だいきの歌を囁き声で歌ったりしており不安になる。額や首筋を冷やすのを冷たいと言つて嫌がるので眠つた隙に濡れタオルを載せたり、ぬるくなつたら交換したりで看病。今日から5日間登園も禁止で、仕事どうしようかと妻と相談しなきゃならない。

次男は四十度近い熱の割には元気にしているがおそらく明日には喉のできものが破れて、痛くなつて食事のままならなくなるだろうから不機嫌になつて手を焼くだろう。ディスイズ育児という感じ。

年度末で仕事も立て込んでいるが、いらいらしちゃいそうなのをうまくやり過ごそうもう中年なんだからなと自分に言い聞かせる。

「自分に言い聞かせる」なんてクリシエは外国語圏にもあるのだろうか？ 現状の日本語でものを考えるとき、よろしくないクリシエに絡め取られないように気を付けないと隘路にはまつてしまふ気がしている。はまるとか、気がしている、つてのもクリシエだな。

夜中、長男の讒言がさらに訳がわからないものになつて、質問にもよく答ええないし、寒くて震えているのか、痙攣しているのかわからないような体の揺らしかたをし始めて、こりゃいかんと夜間診療をしている病院へ連れて行く。トリアージのところで熱痙攣ではないと言われてひと安心し

たが、まだ長男との言葉の受け答えが噛み合わず不安になる。インフルエンザはとにかく熱が上がるのでぼんやりするし震えたりもするので安静にとの診断でひとまず帰宅。解熱剤を飲ませて、就寝。

翌朝、熱はまだ下がっていないのにふたりとももうだいぶ元気になりやがって、朝から「マクドナルドのハッピーセットが食べたい(ハッピーセットのドラえもんのおもちやが欲しい)」などと抜かすので、熱を耐えてがんばつたらまあいいかとドライブスルーへ。ランダムでもらえる3種のドラえもんのおもちやのうち、いちばん欲しかったものが当たりよるこんでいる。肝心のハンバーガーは食べたと言つたくせに二人とも半分以上残しやがったのでもううつつてもいいやと思ひ自分が食べてやった。やけになつていろいろうつちやりたくなつたのだと思う。

その後、油もので気持ち悪くなつたのだろう、長男は床の上に吐く始末…。ハイターで拭き掃除。病み上がりの子どもにマックはいけませんね。当たり前なのになんだかぼーつとしてやらかしてしまつた。

そんなこんなでバタバタしていたら妻も体調を崩し、病院にてインフルエンザと診断される。自分は予防接種のおかげか、今のところ無事だけれど、病人三人どうしよう。

「とのはをおいかけて

三浦 永理

(青翔開智中学教員)

「えりちゃんは強いから分からないよ」

とある友人に相談されながら、言われたことがある。あなたほどの才能がある人がなぜ理解を拒むのかという悲しさ、そんな彼女が私を「強い」と評したことに違和感があった。

自分がどういう人間だったか振り返る時、よく「強い」と評されることに気づいた。果たして、私は他の人たちが言うように「強い」のだろうかと思っている時、その時のエピソードをインターン先の上司に話したことがある。

「それはその人の「強い」の定義と、三浦さんの思う「強い」の定義が違うからじゃないですか？」

言葉を尽くしても伝わらない場面は多い。同じ言葉を使っているはずが、実は違うことを指していることも往々にしてあって、それですれ違って、傷つけあうこともある。傷つけあうくらいなら、初めから声をかけなければよかつ

たと、自閉的になる人も多いだろう。

言葉を尽くせないという体験は、外国語を学んだことのある日本人すべてが経験しているのではないだろうか？

英語の授業になると、「宿題忘れたー！」と言う簡単な一言すら、文法を確認してからでないと言えない。頭の中の思いと言葉が直結しないのだ。英語教師として、私は、あの気持ち悪さ、不便さが、世の中の曖昧さに対抗する訓練になると思っている。母語の世界を超える経験を通して、その土台で思考していたことを実感することもできる。

大学時代に、トルコへ交換留学したことは、私の言語観にまた大きな影響を与えた。

「トルコって何語？」 「トルコ語」なのだが、通った大学では基本的に英語の講義が行われていた。

初めての一人暮らしがトルコとなり、日本語が話せる人がいない中、留学生向けのオリエンテーションが始まった。

「C」の発音が悪すぎて、自分の「C」 という名前すら伝えられなかった。帰りのバス停で、とりあえず英語で喋らないと誰ともつながれないまま終わってしまうのだと思っ
て、どんな形でも自分の思いを英語で表現しようと決意した瞬間だった。

そんな留学生生活でトルコ語クラスをとった。が、これがトルコの実社会で生活するのに必要なスキルとは程遠いレベルの遅さで進行していく。二学期目は、授業を取るのをやめて、サブイバルトルコ語で生活することにした。

私の場合、トルコ語に関して言語爆発は起きなかった。留学の後半戦で、現地人とのトラブルに巻き込まれ、人生で最も自閉的な期間を過ごすことになってしまったからだ。二度と失敗したくないという恐れから、二十歳の私は学校に通い続けるので精一杯の状況に追い込まれた。

なんとか帰国した直後、大学生らしく夏休みにサークルの合宿にいった。そこでは留学から帰ってきた他の仲間もいて、同級生たちにそこでの恋愛体験や現地の人にチャホヤされた話でひとしきり盛り上がっていた。

「だって何もなかったでしょ」

という同期のさりげない一言に

「そうだね、私はなかったね」

と笑って返した私は、いや本当は色々あったのにと頭の中を思い出が駆け巡って、涙が止まらなくなつた。

彼が言った「何も」は、私が思っていたものではなかっただろう。でも、そのさりげない一言が心に刺さったトゲを取ってしまうような出来事だった。普通に生きていたけれど、ちっとも回復していなかった。数年経ったが、その

苦しみは、言葉にしてもなかなか伝わらないままで。

言葉で表現したものが誤解釈され続ける中で、それでも我々は言葉で人に思いを伝えようとする。そんな曖昧なものを使いながら、正確に伝えたいと努力することを惜しまない。それは、ときに論理性の問題、具体と抽象の問題、正確性の問題に帰されたり、表現としての美しさの問題にされたりする。いずれにせよ、どんなに磨いたところで、誤解と決別することはできない。

それでも、言の葉を追いかけて、自分の思いに近いものを伝えなければ、他者との交わりは始まらない。人生は始まらない。私が、言葉に関する教育に関わりたいと考える理由は、人生を生きるための力、世界と和解するための力を身につける道だと感じるからだ。そのためにも、自らの言葉の土台を小さく、ゆつくり、でも着実に築いていく必要がある。

分かり合うことはできなくても、分かり合うことを求めることを。理解されるより理解することを。言葉を尽くすことは、自らを世界に開くということだから。

*

もし自分が自分のテーマを持つなら、やはり「言葉」だろうと思ひ、その「はじめに」としてこの文を残します。

春の大掃除

あきの素生

(くうねるめがね)



こたつの外で過ごす時間が増えてきた。行きつ戻りつしながら、でも結構早足でやってきた春に浮足立ちながら、真冬にはできなかった大掃除に取り掛かった。

家事の中で順位を付けると、一番好きじゃないのが掃除だ。

料理をすると、食べたいもの、おいしいものを食べられるし、おいしいとまではいかなくても最悪空腹を満たすことができる。消化が早いのか燃費が悪いのか、しょっちゅうお腹を空かせている自分にはとても大切なことだ。

洗濯は、しなければ着る服がなくなる。好きも嫌いもない。自分にとっては最も切実な家事と言えるかもしれない。独り身なのだし家事は適当でも、という意見もあるが、限度がある。何度でも言う、洗濯は、しなければ着る服がなくなるのだ。東京ドーム〇個分の広さのウォークインクロー

ゼット(と、それを満たす衣服)でもあれば別だろうが、アパートの収納スペースをやりくりして生活しているの上では望むべくもない。とはいえ、そもそも洗濯は洗濯機がしてくれる。洗濯機には感謝しかない。

そこへいくと、掃除はさして切羽詰まってもおらず、得られるものが少ない(自分にとっては)。きれいになった部屋は過ごしやすく気持ちがいいのだが、「おいしい」「おなかいっぱい」に比べると魅力は半減する。「出したものを定位置に戻す」をこつこつ続けるだけでも随分違うはずと頭ではわかっていても、生来のものぐさが・・・と、掃除をさぼる言い訳ならごまんと出てきて笑うしかない。

加えて、いざというときのためのストック体質が、掃除を困難なものにしている。洗濯機の例に倣えば、お掃除ロボットなるものが販売されて久しいのだから、それに頼ればいいようなものだが、差し当たって必要なのは、長年のストックによつて収納スペースからはみ出すものたちのお片付けロボットなのである。お片付けが終わらなければ、お掃除ロボットの出番はない。

さて、そんな中、大掃除(大片付けといった方がふさわしいかもしれない)に取り掛かった。はみ出しているものをなくすには、捨てるか収納スペースに収めて見えない化するのだが、収納スペースに収まらないからはみ出して

いるわけで、わが家の収納スペースにスペースはもはやない。であるならば、スペースを作るために、そこにあるものを捨てなければならぬ。どちらにしても、捨てなければならぬのだ。気に入ってストックしてきたものを捨てるのは、なかなか骨が折れる仕事だろうと思っていたのだが、実際には、時間をかけて価値を失ってきたものも多かった。そういったものは、さくさくと捨てた。

スペースができると、少しずつだがものが片付いていき、きれいになっていく部屋にこれまた少しずつモチベーションが上がって、片づけが楽しくなってきた。が、いかにせん量が多いため、現在進行形で片づけ続けている。いつ終わるとも知れないが、春の大掃除が初夏の大掃除、梅雨の大掃除と季節をまたいでいかにように、しばらくこつこつ続けたいと思う。

十年ちよつと前、実家を出るときも、大片付けをした。自分のものは全部片づけてから行くように、と家族からお達しを受けた。前の職場で、有給休暇をすべて使って新天地での生活に備えて、と先輩方から言ってもらい、時間は充分にあった。いろんなものを片付けたが、そもそもこちらに持ってくるものもあつたので、たくさんものを捨てたという記憶はない。そんな中で、特に印象に残っている

のは本だ。何度も読んだ本、好きな作家の本、いつか読むと買い込んで、本棚に並べていた本。とても捨てたりできなかった。半ば家族に呆れられながら、すごく気に入っている本は扉つきの棚、次に気に入っている本はガラス戸で日に当たる棚、読みたいけど優先順位が比較的低めの本は少しかわいらしい段ボールに詰めて押入れに、としまい込んだ。自分のものがほとんどなくなった元自室に、本だけが今でも残っている。帰ったときには、今回は、それを読もうかな、と本棚を眺めて、相棒を決める。片付けなくてよかった。

スコシ・ヤクニタツ 座敷わらし



ドラメリア (座敷わらし)

座敷わらしになってしばらく経つ。ふと気づいたらなっていたのだ。今のしごとにつくために縁もゆかりもない土地にやってきたけれど、どうも簡単なことではなかったと気づきはじめて頃だった。周囲を飛び交う言葉も学校という文化も何もかも違和感だらけで、「ああ、『本が好き』ということだけを頼りに飛び込んだけれど、やっていけるだろうか」と自問していた頃でもあった。これまでは意識していなかったけれど、本を読む人は自分が思っているよりずっと少なく、声の届く相手はごくわずかだ。そんなことを思いながら街を歩いていたら、夜道の先にぼうつと黄色く点る明かりがあった。近づいていくとお店があり、吸い込まれるようにガラス戸を開ける。

そこはずいぶん不思議な空間だった。天井から様々な物が吊り下がる店内。笑顔絶やさない店主のそばにある幾つものたき火。山吹色の明かりに照らされた本たちに囲まれて、遅くまで本の話をした。幾度もそれをくり返して、

くり返して、ふと気づくと自分もたき火のひとつを守る側になっていたのだ。これからもその火を守っていくのだろう。

ちなみに、この名の由来を時々聞かれるが、後半はこの世の果て、影と竜巻の国」から取られており、前半部分は国民的人気を誇る青い猫型ロボットにちなんでいる。ちよっとしたことでも困っている店の主を手助けしたときのひと言「あなたはわたしのドラ○○○だ」から、それまで名を持たずに漂っていた座敷わらしは、スコシ・ヤクニタツ座敷わらしになった。

そして、現在までここにいます。今いる場所は春から少し変わるけれど、たき火を守る座敷わらしでありつづける。少しだけ・役に立って。



・編集後記：懐かしい方にお会いしたり、新しい出会いがあったりした三月でした。どの集まりにもなぜかいる、でも何も無い。何しろ座敷わらしなので。

ドラメリア (編集長)

公立鳥取環境大学岩田研究室で三月二十八日に三砂慶明さんの「読書室」読書会が行われました。岩田直樹『橋田邦彦・現象学・アーレントの再解釈』です。そして三月は数多くの方々のご訪問がありました。感謝申し上げます。

奈良敏行 (発行人)